

4. 展示計画

Exhibition plan



現博物館2階クジラ展示室

名護に関わりの深い鯨類の展示

4. 展示計画

(1) 展示の基本方針

平成20年度に策定された基本構想では、展示の基本方針として、「人と自然の関わりを総合的に捉える展示」、「地域に根ざした展示」、「名護だけでなくやんばる全体のガイダンス機能を持った展示」などの方向性が示されています。

新名護博物館の展示活動は、以下のように整理されます。

- 常設展示
- 企画展示・特別展示
- 市民が主催する展示(ギャラリー利用)
- 収蔵展示
- 移動博物館
- バーチャルミュージアム

それぞれの展示活動がどのような内容かは、活動計画ですでに述べました(p.24~26)。

本章では、これらの活動計画を踏まえ、新名護博物館の最も基幹的な展示活動である常設展示を中心にした、より具体的な展示テーマや展示内容を示します。



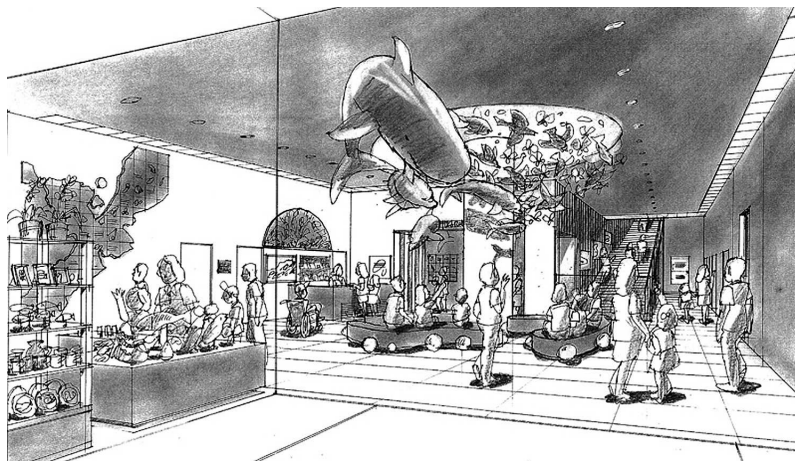
4. 展示計画 -屋内展示-

(2) 常設展示の構成と展開

エントランス

エントランス（入口）では、常設展示に入る前に、来館者が「名護・やんばる」地域の概要を全体的に捉え、自分の立ち位置を確認するための導入展示が必要となります。

たとえば、名護・やんばるの俯瞰（ふかん）図・写真などを展示すれば、現在地を確認したり、ポイントとなる場所や建物を把握できるほか、博物館から離れた場所に来訪者を誘う効果もあります。



エントランスのイメージ図

屋内展示

屋内の常設展示では、大きなテーマとして「海」、「まち・ムラ」、「山」の3つを設定し、それぞれさらに細かなテーマを展開します。

立地の傾斜を利用して低地には「海」を、高地には「山」を配置するなど、より直感的にイメージしやすい展示設計を想定し、それぞれのテーマの中で「名護・やんばるのくらしと自然」を表現する空間創りをめざします。

これら3つのテーマの間には明確な区切りを置かず、展示に連続性を持たせるよう工夫します。

また、それぞれをつなぐ連携展示を境界付近に設置します。「川」の展示は、「海」「まち・ムラ」「山」にまたがって展開する方法を検討します。来場者は、設定された順路に従って進むのではなく、自分の関心のあるテーマへ自由に足を運ぶことができます。

なお、歴史分野については、それぞれのテーマの中でくらしや自然と関連付けながら紹介します。

※大テーマの位置づけが難しい美術工芸資料や、常設展示ではカバーできないような、より専門性・地域性の高いテーマについては、無料スペースや企画展示、市民ギャラリーなどで紹介します。

4. 展示計画 -屋内展示-

展示テーマ：海

海は、沖縄のくらしと自然を考える場合に必要不可欠な要素です。ここでは、名護湾・羽地内海・大浦湾の3つの海をモデルに、やんばるの海の自然と人との関わりを展示します。

【海のくらしと自然】

○ピトゥ漁の今昔

鯨類は、海のくらしに関係の深い生物です。名護湾地域を中心として、コピレゴンドウなどの小型鯨類を対象とする「ピトゥ漁」が昔から盛んにおこなわれており、今も続いています。1950～60年代には、春先に回遊するザトウクジラをおもな対象とした、大型捕鯨もおこなわれていました。

このコーナーでは、開館当時から名護博物館が収集し続けてきた豊富な鯨類の骨格資料を基に、名護・やんばる近海で見られる鯨類の生態、捕鯨の歴史などを紹介します。

○沖合

サンゴ礁の外側に広がる沖合は、普段の私たちの生活とはあまり関係ないように思われがちですが、物質循環や生態系の観点から考えれば決して無関係ではありません。たとえば、私たちになじみの深い生物の中には、大海原を回遊・浮遊して移動するものもたくさんいます。また、私たちが陸域で出すゴミは海へ流され、人の手が到底届かないような深海に蓄積され問題になっています。

このコーナーでは、マグロ・カツオ漁などの近海漁業や回遊・浮遊する生物、深海の生態系などにスポットを当てて紹介します。

○イノー(サンゴ礁)

沖縄を特徴付ける生物地形であるサンゴ礁は、裾礁(きょしょう)、堡礁(ほしょう)、環礁(かんしょう)にわけられます。沖縄島の多くで見られる裾礁は、潮の干満で干上がるヒシ(礁原)と浅い水深を持つイノー(礁池)を持つことが多く、その縁にある礁縁(白波が碎ける部分)をはさんで、その外側の水深が急に深くなる礁斜面へと続きます。

サンゴ礁は生物多様性が高く、人々は昔からヒシやイノーで漁をおこなって海の幸の恩恵を授かってきました。また、サンゴ礁は天然の防波堤の機能もあり、台風や津波から人々や農地・集落を守る役割も果たしてきたのです。

このコーナーでは、サンゴ礁で見られるさまざまな環境とそこでくらす生きもの、伝統的な漁具・漁法などを紹介します。

4. 展示計画 -屋内展示-

○ 貝塚時代のくらし

今から約2,000年前、沖縄貝塚時代後期（弥生時代）の沖縄では、黒潮や貿易風を利用して本土（九州など）からやって来る人々を相手にする、貝交易がおこなわれていました。

名護市では、大堂原（ウフドーバル）貝塚を代表とするさまざまな貝塚時代の実態が、過去の発掘調査によって次第にわかるようになってきました。

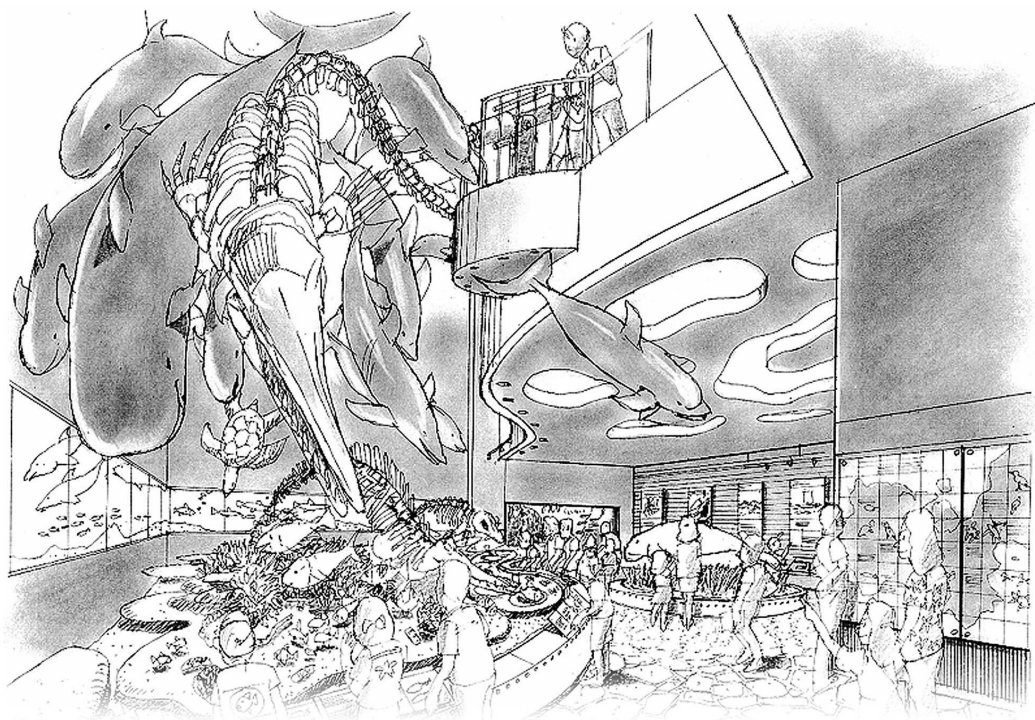
このコーナーでは、サンゴ礁の展示と合わせて、市内の発掘調査の成果や最新の学説を基に、貝塚時代のくらしを紹介します。

○ 干潟・河口

マングローブがある干潟や、海水の影響のある河口域は生物多様性の高い場所です。干潟はさまざまな生物が生息しており、物理的、生物的に有機物を分解し、水を浄化する機能を備えています。河口域は、陸を流れる川の淡水域、上流の水源地、山林へとつながる入口でもあり、さまざまな生きものが移動する時に通ったり、成長する場所として重要です。

また、名護市の屋我地島では、こうした干潟に入浜式の塩田を造り、古くから塩づくりが営まれてきました。

これらの干潟・河口域の環境やそこにくらす生きもの、塩田による製塩や漁など、自然の中での人の営みを紹介します。



展示イメージ図

4. 展示計画 -屋内展示-

展示テーマ：まち・ムラ

【名護・やんばるの歴史とくらしの変遷】

○ やんばるの集落の成り立ち

高台に居住したグスク時代の人々は、近世期には低地におりてきます。やんばるの集落にあるグスクやウタキ（御嶽）、フルムラ（古村）と称する場所などには、その集落の成り立ちを示す伝承も数多く残されています。

18世紀頃の伝統的な村は、背後にグスクやウタキをもち、その下の草分けの家から海の方へ基盤型の集落を形成していきます。

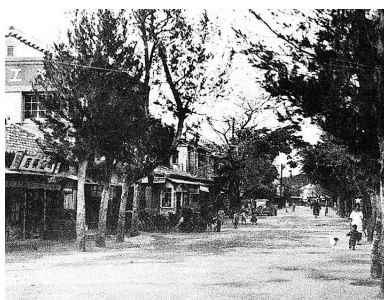
一方、首里・那覇などから移り住んだ人々は、山中や川沿いに散在的に住みつき、屋取（ヤードゥイ）集落を形成しました。ここでは、現在も各地に残る基盤型の集落形態や、首里王府との関係などを展示、紹介します。

○ 名護まちのにぎわい

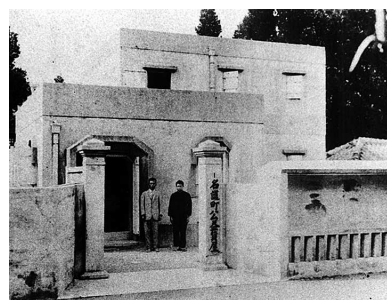
近代以降の名護まちのにぎわいは、国頭郡役所が名護の東江に移転したことや、国頭街道の道路整備がおこなわれたことに始まります。名護を中心とした海路と道路交通網の整備は、名護のまちを商業のまちへ発展させる要因となり、やがて、土族出身の商人や鹿児島商人も進出するほどのにぎわいを見せるようになりました。また、国頭農学校そして県立第三中学校や県立第三高等女学校が、人材育成に果たした役割も見逃せません。道路交通以外では、やんばる各地と中南部をむすんだ山原船の活躍も紹介します。やんばる各地から材木、薪、木炭、砂糖樽、藍玉（あいだま）などを中南部に運び、那覇や与那原港で買入れた食料や泡盛、本土産木材、工業製品を、やんばる各村の共同売店などで売買した交易の状況も、近代のくらしを語る上で不可欠です。



名護大通り(大正10年ごろ)



名護大通り(昭和15年ごろ)



名護町公益質屋(大正15年設置)

4. 展示計画 -屋内展示-

○ やんばるの沖縄戦

沖縄の歴史上、物心両面で甚大なる被害を被った沖縄戦について、なぜ沖縄戦がおこり、どのような経過を経て、現在までつながっているかを表現します。やんばるの沖縄戦の特徴は、(1) 米軍上陸前の避難民の受け入れ(2) 宇土部隊・遊撃隊の戦闘(3) 三中・三高女の学徒動員(4) 山中での兵と住民の軋轢(5) 住民虐殺(6) 収容所からの戦後復興、などが挙げられます。沖縄戦の中で、これまで表現されてこなかったやんばるの戦争の実情について住民の証言を交えながら展示します。

○ 名護・やんばるゆかりの人物

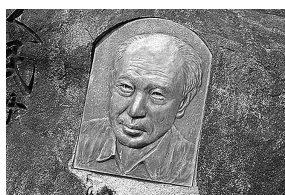
琉球王府時代から近現代にいたるまで、名護・やんばるにゆかりのある、あるいは影響を与えた人物を取り上げ紹介します。

近世期の人物では、程順則と蔡温にスポットをあてます。程順則は、琉球に『六諭衍義(りくゆえんぎ)』をもたらし、蔡温は羽地大川の改修、杣山(そまやま)政策などを推し進めた功労者で、やんばるの歴史を語る上で欠かせない人物といえます。

近代では、沖縄・日本の状況から反骨精神を培い、社会運動をリードした徳田球一や、ゾルゲ事件に連座した宮城與徳など、一人の人物からその背景にある時代を投影する展示をおこないます。



名護親方(程順則)



徳田球一石碑



展示イメージ図

4. 展示計画 -屋内展示-

【ムラのくらしと自然】

○年中行事

伊是名・伊平屋を含む名護・やんばるには全体で約190の字があり、名護市にはそのうち55の字があります。これらの地域には、ムラのコミュニティが今も色濃く残っており、それぞれに異なる個性がみられます。

ムラごとの年中行事は字単位で催され、その伝統が今も引き継がれています。エイサー、豊年祭、村踊りなどの催しは、現在でもムラをあげての大切な行事です。

ここでは、各字の御願行事を司るカミンチュ（神人）の存在や年中行事を通して、集落と自然との関わりを字ごとに展示していきます。

○人生儀礼

このコーナーでは、人の誕生から葬送、33回忌までを展示します。時代とともに変容しつつあるとはいえ、地域との関わりという点で誕生から弔いまでをみると、名護・やんばるにおける地域のつながりが、今も強く残っていることがわかります。

また、久志地区に残る、満1歳になった幼児を字全体で祝う行事（「キリシタン」といわれる）なども、個性的な事例として紹介します。

○生業

名護・やんばるの人々が、自然の力や恵みを巧みに利用し、生業としてきた事例を展示します。農業でみると、近世期における貢納品であった米とキビの生産のようすを、各地の間切と首里王府との関係とともに解説し、田んぼや畑の変遷、品種、栽培方法などとともに展示・紹介します。

また、ウッチン（ウコン）やその他の農産品の栽培などについても展示します。



ウガンバーリー（名護漁港）



仏壇の供え物（お盆）

4. 展示計画 -屋内展示-

展示テーマ：山

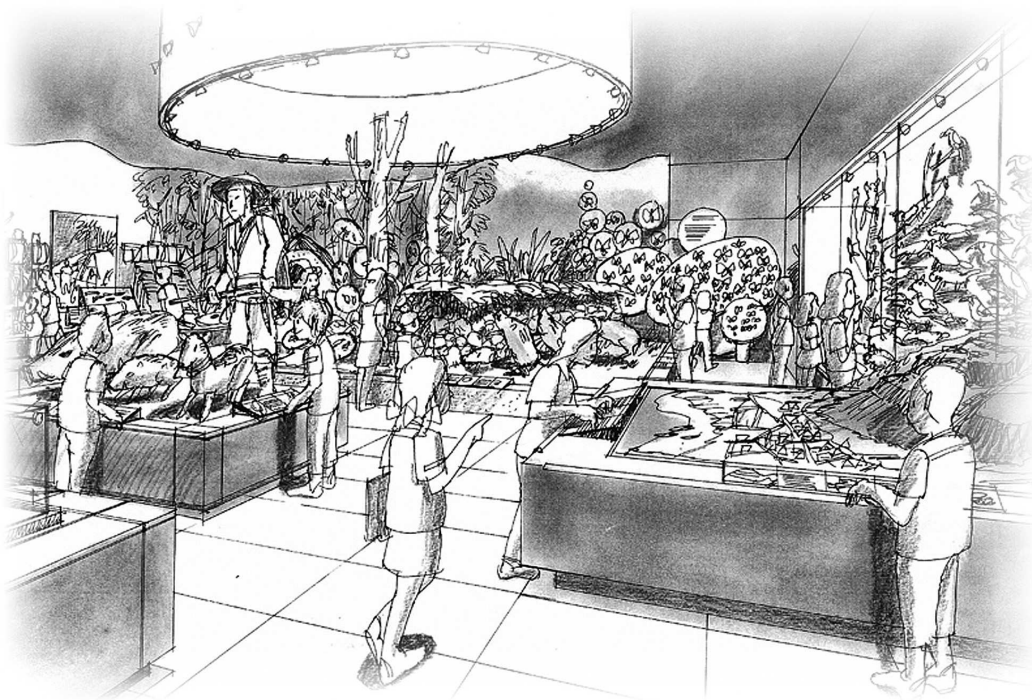
【山のくらしと自然】

○ 地質と植生

名護・やんばるの地質は、おもに中生代以前に形成された岩石からなり、中南部に比べて高い山や溪谷、河川が発達し、豊かなイタジイの森林に覆われています。多くは砂岩、泥岩などからなる堆積岩を主とする地層ですが、本部半島には古期石灰岩を主とする地層も分布しています。このような特徴から、東海岸の褶曲（名護市天仁屋）、本部半島の円錐カルスト（本部町山里）、塩水が湧く塩川（本部町崎本部）など、国内でもめずらしい貴重な地形・地質を見ることができます。

これらの地質の特性による土壌の違いは、その地域で見られる動植物の種類にも影響を与えます。一般的にやんばるの森として連想されるイタジイ（スタジイ）の森は、「国頭マージ」と呼ばれる酸性土壌であるのに対して、石灰岩が発達する本部半島では特異な土壌が優占し、他と異なる植物が見られます。

このコーナーでは、地形・地質によって異なる植生を取りあげながら、名護・やんばるの代表的な観察スポットも紹介します。



展示イメージ図

4. 展示計画 -屋内展示-

○ 生物多様性

琉球列島は日本の中でも生物多様性の高い地域です。亜熱帯に位置し、南方系の生物が多いほか、大陸との分離・結合をくり返してきた歴史から、島々で独自に進化した固有種が多く見られます。山々は比較的高く、豊かな自然が残る名護・やんばるの森・川は、固有種あるいは絶滅が心配されている貴重種が生息する地域です。

しかし、生物多様性の土台となる生物の多様な生息環境を考えた場合、このような人里離れた奥深い森だけでなく、集落に近い林や農耕地など人々の生活空間と重なる地域にも目を配る必要があります。

このコーナーでは、集落に近い里山的環境から人里離れた山奥の環境まで、多様な環境で見られるさまざまな生物を紹介し、生物多様性と人々の暮らしとの関連について考えていきます。

○ 山の恵みと暮らし

人々が利用する山の資源は、生物多様性が維持された豊かな生態系に支えられています。リュウキュウイノシシは農作物を食い荒らしますが、同時に貴重な食料でもあり、猪垣の設置とともに琉球犬を用いたイノシシ猟＝インピキ（犬曳）がおこなわれてきました。やんばるの山々は、重要な木材の供給地であり、かつては薪として切り出された木々が山原船で中南部の都市へ運ばれました。

また、森林による保水能力が高いため、今現在でも沖縄島の重要な「水源地」の役割を果たしており、北部にある多くのダムから中南部へ送水されています。

しかし、行き過ぎた山の利用は、生態系を脅かし、資源の枯渇を招きます。琉球王府時代にすでに蔡温（さいおん）による森林保護のための「杣山（そまやま）政策」があったように、限りある資源を守りながら利用することは、昔からの課題でした。

開発や人工改変によって、名護・やんばるの山や川の生態系が危機に瀕するとき、私たちが自然から受ける恵みもなくなるのです。

このコーナーは、山々の自然の中で営まれてきた生活を紹介するとともに、過去から現在、そして未来へ向けて私たちが直面している課題を取り上げ、自然と共生する暮らしを考える場とします。



イタジの森

4. 展示計画 -屋内展示-

常設展示のテーマ(案)

まち・ムラ

名護・やんばるの歴史とくらしの変遷

くらしと自然

年中行事

豊年祭などの村落祭祀を、稲作との関わりや
ムラ・字との関わりを通して示す
各地区の村落祭祀 豊年祭

人生儀礼

地域差があり、時代とともに変容する名護・
やんばるにおける人の誕生から葬送までの
儀式、死生観
人の一生 葬送儀礼と墓制

生 業

自然との対峙・共存のなかから生まれ、時代
の淘汰を経てきた名護・やんばるの生業や、
ものづくりに反映される生活文化
田畑のしごと(剥製と民具)
ものづくりの知恵

やんばる集落の成り立ち

やんばるのグスク・拝所と集落との関 古スクと集落
係、集落移動などの事象から近世期の 古島の形成
集落の変遷を示す 村落移動と近世集落

名護まちのにぎわい

海上交通や道路整備、学校・公 名護・やんばるの沖縄戦と戦後
共施設などの設立で起こった の諸相を、生活者の視点で展示
物流・情報 名護・やんばるでの日本軍
国頭街道と名護 収容所のくらし
名護十字路の変遷 戦後復興
名護の市場 復帰から現在まで

やんばるの沖縄戦

名護・やんばるゆかりの人物

さまざまな形で名護と関わった歴史上の人物を、
その背景とともに紹介
程順則(近世琉球とやんばる)
蔡温(近世琉球とやんばる)
宮城与徳(やんばるの近代)
徳田球一(戦前・戦後のやんばる)

海

海のくらしと自然

ピトゥ漁の 今昔

名護近海で見られる鯨類の生態、ピトゥ漁に
おける海と人々の関わり
クジラ大型骨格標本 ピトゥ漁

沖 合

外洋に生きる多様な生物から、その生態や
島々との関係を読み解く
回遊生物 深海(鯨骨生態系など)
マクロ漁・カツオ漁

イノー (サンゴ礁)

“食糧庫”として不可欠だったイノーの環境、
人々との関わり等
サンゴ礁の生き物 藻場、ジュゴン、ウミガメ…
サバニ漁、タンク船、イザリ

貝塚時代 のくらし

解き明かされる島々の交流、海と集落の姿
大堂原貝塚の発掘調査
貝塚時代のくらし

干潟・河口

多様な生物を育む干潟、マングローブの役割
と人々の関係
マングローブ干潟の生物
汽水域の生物 塩田

山

山のくらしと自然

地質と植生

北部の地層と植生を通して、沖縄島の成り立
ちや固有性を示す
石灰岩と国頭マージ
天仁屋の褶曲

生物多様性

里山的環境から奥山への多様な環境とそこに
棲む生きものを紹介
やんばるの生物多様性
生態系再構成展示

山の恵み とくらし

沖縄島における資材供給地だったやんばるの
位置づけを、蔡温の政策などとともに示す。
伝統的な山仕事を紹介
炭焼き、材木、薪 イノシシ猟と猪垣
藍栽培 蔡温と杣山政策

川

川から見える動植物・生態系の紹介や、やん
ばるの森と雨の関係、水源地として機能する
やんばるの価値
水源地 溪流の自然とくらし
ダムと集落

4. 展示計画 -屋外展示-

屋外展示

屋外展示は、より本物に近く、五感に響くという点や、自然環境の中で空間の制約がなく展開できる点では、屋内展示より優れているといえるでしょう。しかし、保存・管理の面ではより一層の配慮が必要となります。

新名護博物館では、本来野外にある資料については、可能な限り屋外で展示し、実際の資料を使った手作業によるものづくりや、加工を体得できる場を設けることで、テーマである「暮らしと自然」をより実感できる展示にします。古民家の復元や里山的環境の再生が、フィールドに足を運ぶ入口の役目を果たすことにもなります。

① 暮らしの実践・体験エリア

名護・やんばるの暮らしの中で培われた知恵やわざを体感・実践することで、過去から現在、未来へつながる普遍的な価値を見出すとともに、新たな発見や創造を通じたものづくり・人づくりを支援する空間をめざします。

○発見や創造に満ちた空間をつくるために

名護・やんばるの暮らしをより深く知るためには、生活空間、すなわち、生活の土台としての住居を再現することが一つの鍵となるでしょう。復元された住居に入り、生活空間にふれることで、そこにくらす人々の心情や思いを読み取ることができます。

また、こうした空間で、昔の道具を使った手作業を体験したり、人と人が触れ合うコミュニケーションが図られることで、新たな発見や創造が生まれ、ものづくり・人づくりにつながるのです。

○展示の内容

「暮らしの実践・体験エリア」では、カヤブキヤー（茅葺屋）、高倉のほか、近・現代を代表するセメント瓦の家屋などを再現展示します。そこは、自然素材や加工技術、構造の変遷などを通して、先人たちの知恵を学ぶことのできる空間です。そして、民家を再現するだけでなく、民具を使った実践的体験を積極的に展開し、屋外展示をより生き生きとしたものにするをめざします。

また、単なる「もの資料」の保存ではなく、材料の確保から製造にいたるまでの技術の保存という観点から、住居の材料となったリュウキュウチク（ヤンバルダキ）やチャーギ（イヌマキ）、イーグ（モッコク）、イジュなどの樹木を、博物館敷地内（自然と人との共生エリア）に植林することを検討します。

4. 展示計画 -屋外展示-

近代民家の復元

○ 赤瓦屋

名護・やんばるの人々が住居の屋根に赤瓦を載せることができたのは、明治20年代になってからのことです。それでも、ウェーキヤー（裕福な家）でなければ、このような家を建築することはできませんでした。

今回、復元を検討している仲尾殿内（なかおドンチ）は、名護市羽地地区に位置する仲尾次の豪農であり、明治34（1902）年に建築されましたが、老朽化によって平成元年に取り壊され、一部の部材が保管されています。建築面積は121.95㎡（36.68坪）であり、復元されれば、木造の伝統的な間取りや、指し仕口などの木工技法の見本と材種名を示す展示建造物になるでしょう。

○ セメント瓦屋

戦後、1960年代の名護のまちは、セメント瓦が並んだ沖縄特有の景観がありました。現在でもその家並みは残されています。名護は、セメント瓦発祥の地で、土を屋根に載せる赤瓦よりも重量が軽く、安い価格で家の建築ができ、断熱効果もあるため、沖縄中にセメント瓦が普及しました。

ここでは赤瓦建築の家屋配置を踏襲しつつ、戦後昭和30年代頃に建築し、実際使用されたセメント瓦民家の移築を検討します。

○ 高倉・かやぶき屋

高倉は、カヤブキヤー（茅葺屋）とされるリュウキュウチクを材料とした屋根の建造物で、穀物貯蔵に使用されました。住居としてのカヤブキヤーには、掘立小屋同然のアナヤー（穴屋）と、よりしっかりした木造造りのヌチジャー（貫木屋）がありました。いずれもセメント瓦屋より古い建築物です。

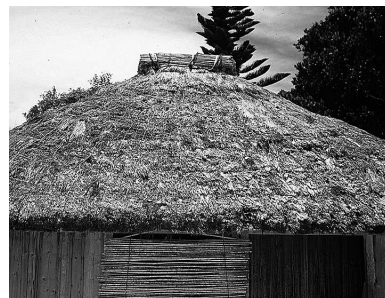
高倉は、現博物館で展示しているものを移築する予定です。ヌチジャーとアナヤーについては、今後の課題とします。



赤瓦屋（屋部久護家）



セメント瓦屋



かやぶき屋

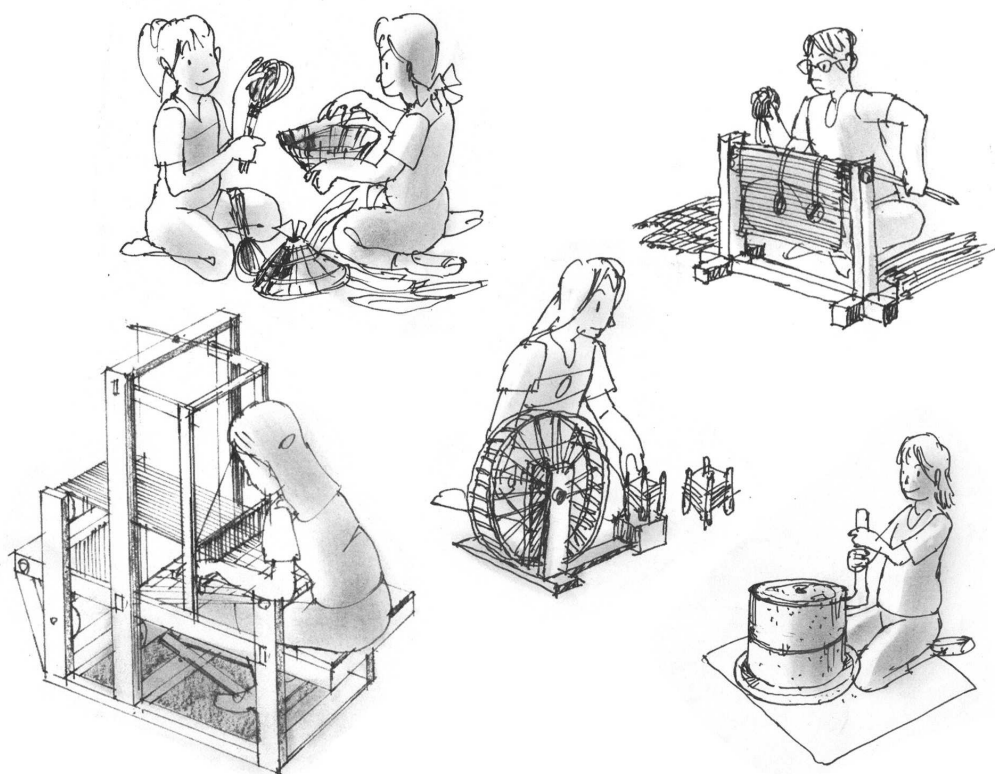
4. 展示計画 -屋外展示-

民家と民具の利用

復元された民家には、可能な限り民具を露出展示し、実践的な体験学習やものづくりの場として活用します。資料の保存上の課題はありますが、より臨場感のある展示空間となることをめざします。

ものづくりに使う材料として、「自然と人との共生エリア」で育てた植物などを使用することもできます。竹林から竹を取っておこなうパーキ（かご）づくり、芭蕉から繊維を取っておこなう糸づくり、タカバタ（高機）を使った布織りなど、さまざまな活動に展開させることができるでしょう。

また、民家は来館者や博物館活動に関わる人々の憩いの場でもあります。民話の語り、紙芝居などの上演、芸能教室の開催場所などに利用することも可能です。現博物館の中庭のように、親しみのある空間づくりをめざします。



展示・活動の概要

敷地内で取れた芭蕉から布を織る／竹林から竹を取ってパーキづくり／稲作の脱穀や精米／さまざまな民具の使用体験（アイロンなど）／仏壇への供え物（死生観や季節変化など）／芸能教室／民話の語り、紙芝居などの上演／雨水の集水装置 など

4. 展示計画 -屋外展示-

② 自然と人との共生エリア

「自然と人との共生エリア」では、自然と共生してきた名護・やんばるのくらしを体感し、「循環型社会」と「生態系サービス」をキーワードにして、自然と人との共生について考えることのできる空間をめざします。

その空間では、人里から山へ続く自然の連続性をイメージして、田畑や水路、植生などを配置し、自然と共生してきた名護・やんばるのくらしを体感できます。昔を回顧的に懐かしむだけでなく、過去から学び、現在の視点から未来のくらしと自然の在り方を考え、「生きる力」を学ぶことができる展示とします。

○ 循環型社会のヒントとなるくらし

自然の恵みは無限ではありません。東日本大震災で震災後のエネルギー問題が顕著になり、これまでの大量消費社会を見直す気運が高まってきました。今まさに、自然と共生する循環型社会の実現が求められているのです。

伝統的な名護・やんばるのくらしは、循環型社会へのヒントを私たちに与えてくれます。かつてのやんばるでは、アタイグワー（野菜畑）で作物を育て、芭蕉から着物を織り、竹からパーキ（かご）などの道具を作る自給自足型の生活が営まれていました。生活から出る糞尿やゴミは家畜のエサや堆肥に使われ、育てた作物や家畜をまた食べるという循環型社会が実現していたのです。

○ 生態系サービスとは？

私たちは、生態系からさまざまな恩恵を受けています。それは単純に食料として資源を得ているという意味ではありません。食料資源はもちろんのこと、水の浄化や廃棄物の分解、気候調節、光合成による酸素の供給、水や栄養の循環など、生態系から人間が受ける利益は計り知れません。

たとえば極端な話、植物がなければ酸素はつくられず、二酸化炭素が増えるばかりで、やがて動物も呼吸できずに死滅するでしょう。豊かな水や栄養がなければ、良い作物は育たないでしょう。

このように、私たちが生態系から受け取る恩恵を「生態系サービス」とよびます。私たちが木陰に入って涼んだり、森の中で川のせせらぎの音を聴きながらキャンプをしたりするレクリエーションも、生態系サービスのひとつといえます。

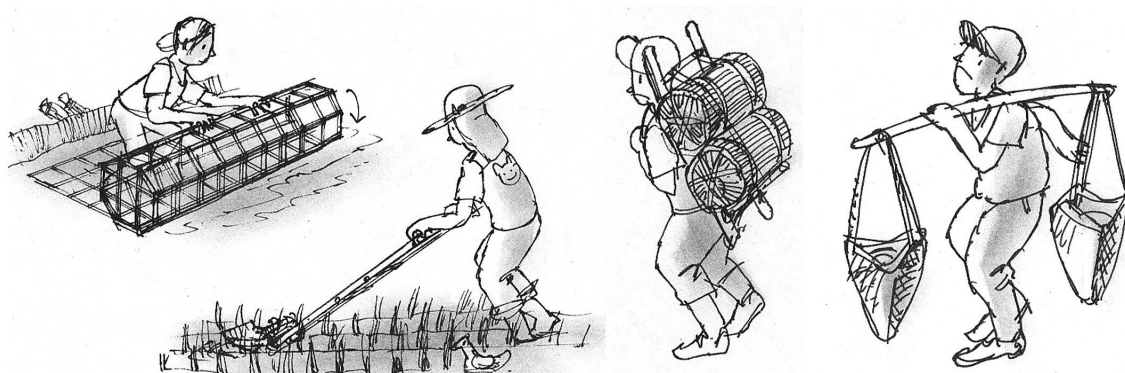
生態系サービスを安定して受け続けるためには、安定した生態系が必要であり、そのためには生物の多様性が保たれていることが重要と考えられています。生態系は私たちが考えている以上に複雑で、人為的に自然改変をおこなう場合は、本来の生態系のバランスをくずし、生態系サービスの不安定化を招く恐れがあるということを忘れてはなりません。

4. 展示計画 -屋外展示-

○ 博物館アタイグワー（在来作物畑）

田畑や果樹園では、在来の作物を育てて収穫します。パーキづくりの材料となる竹林や家屋の材となる樹木（チャーギなど）、布・紙の原料となる芭蕉なども育てていきます。農業体験に加えて、材料を加工するものづくりや、シルピイシ（印部石）を使った農地の測量体験、農作物と生物の関係性を探る環境学習など、さまざまな体験学習に活用されるでしょう。

また、微生物で分解する浄化槽の仕組みや、農業用水路に水車を設置し、動力や電力への転換を見せるなど、物質循環やエネルギーについて考えることのできる展示も検討します。



○ 在来家畜の飼育

来場者にとって、生きている動物は、はく製などに比べて格段に魅力的な存在です。ここでは琉球犬やシマピージャー（ヤギ）などを飼育し、その利用方法を紹介して、名護・やんばるの狩猟や家畜文化について考える場とします。



アーク（沖縄の在来豚）



ヒージャー（ヤギ）



トゥラー（琉球犬）

4. 展示計画 -屋外展示-

○ 里山の自然散策路

アタイグラー（在来作物畑）のある人里、里山的環境から奥山へ続く自然環境を再現し、散策路や休憩所を整備して自然観察ができるようにします。

水田とつながる自然度の高い水路や小川、クムイ（池）のある環境は、かつては普通に見られた光景ですが、現在は失われつつある環境で、こうした場所を好むメダカやドジョウ、タウナギなども姿を消しつつあります。このような環境を再現することで、魚や水生昆虫、これらを食べるカエルや鳥類など多様な生物によって構成される生態系を観察することができます。

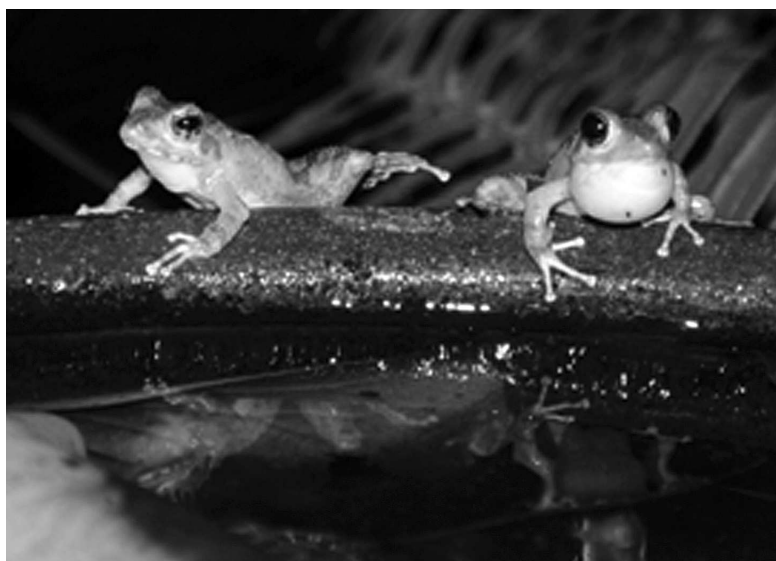
また、果樹園から奥山へ続く林でも、さまざまな生態系を見ることができるようでしょう。

食草とチョウの関係、ドングリを付けるシイの木と昆虫（クワガタなど）の関係、林や田畑にすむ昆虫をエサにして子育てする鳥などが代表例です。

ここで再現する林はあくまで人里から近い環境であり、一面がイタジイ林で覆われ、ヤンバルクイナなどが生息する深い森ではありません。このような環境で見られる生態系については常設展示の一部と、他の研究施設や「現地の本物」に譲ります。

自然と人との共生エリアの展示は、人々の暮らしと生物多様性をテーマにしており、人間にとって都合の良い自然を見せるということではありません。人々の関心が高い、あるいは見映えの良い特定種を過剰に増やしたり、本来はこの地域に見られるはずのない生態系を再現したりするという意味合いでもありません。

また、失われつつある本来の生態系を再現する場合においても、博物館周辺の生態系や遺伝子を攪乱する恐れがあるので、十分な検討が必要です。



リュウキュウカジカガエル



リュウキュウメダカ



リュウキュウハグロトンボ

4. 展示計画 -屋外展示-

屋外展示・活動の概要

○ 里山の自然散策路

自然水路・クムイ・カー（水生昆虫、メダカ、ドジョウ、タウナギ等）／ドングリ（イタジイ・オキナワウラジロガシ）／ホウライカガミとオオゴマダラ／廃材とクワガタ幼虫／リュウキュウチク・チガヤ など

○ 在来作物畑

水田・棚田／畑（イモ、芭蕉、島バナナ、シークワサー、在来農作物）／サクラ・アデク・モロコシソウ／印部石／雨水の利用、微生物による浄化槽／水車（小水力発電、動力）／太陽光発電 など

○ 在来家畜などの飼育

ヤギ、琉球犬、チャーン、アヒル など

○ その他

炭焼き窯／墓（中に入ることも可）／砂糖車 など



シークワサー



ターム(田イモ)



茶畑

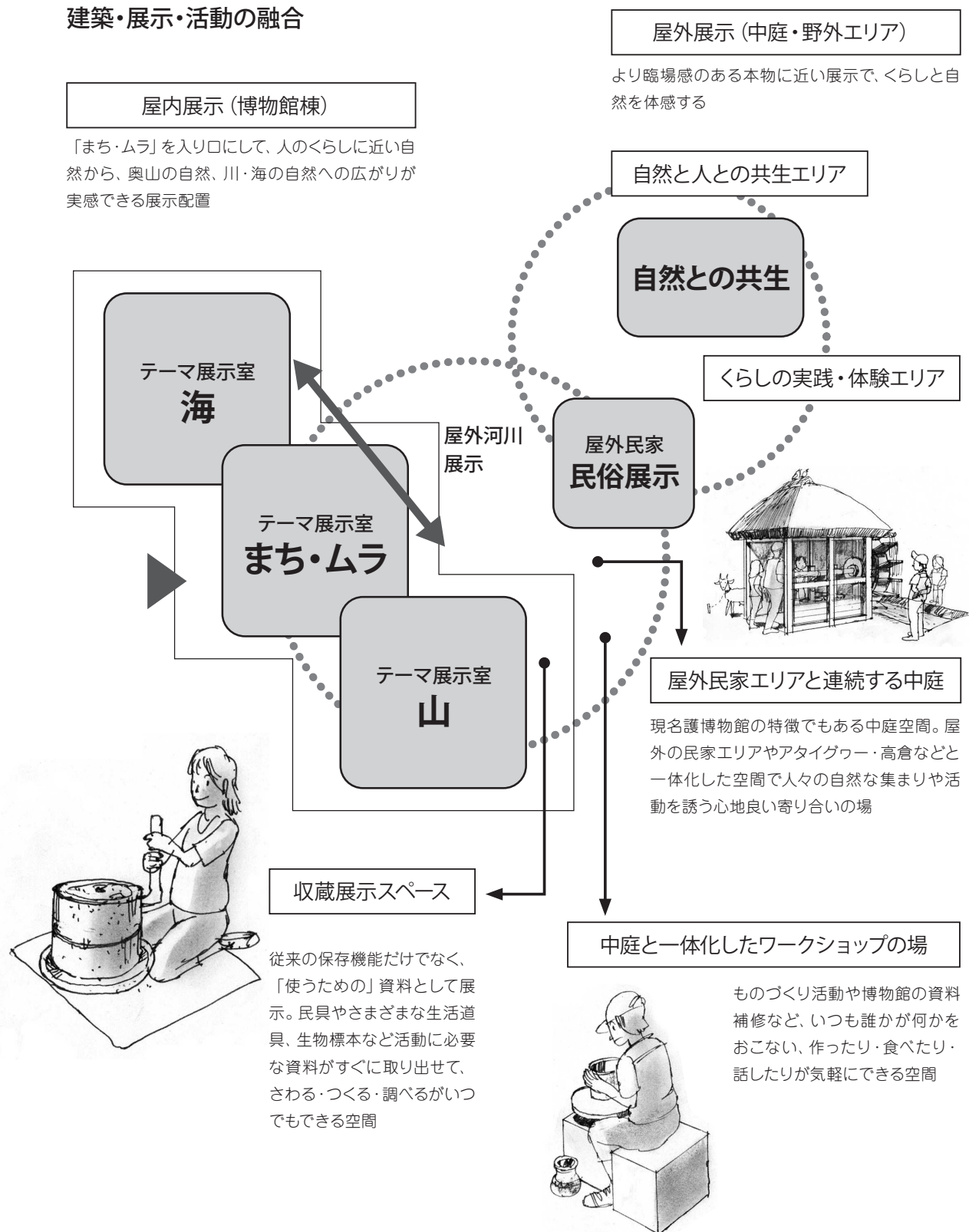


水田

4. 展示計画 -まとめ-

(3) 展示空間と展示テーマ

建築・展示・活動の融合



4. 展示計画 -まとめ-

屋内展示と屋外展示

<エントランス導入展示>

立ち位置確認のための俯瞰的な視点を導入。展示空間としてのインパクトを持たせる造形
 沖縄島北部の大型空撮写真+情報検索
 北部地域交流・連携活動情報受発信
 北部地域フィールド活動インフォメーション

<屋外展示> 体験型展示を目指して

五感にひびく展示、つくる展示／収蔵資料を活用する展示／ 暮らしの知恵をしらべる、発見する、生み出す展示

伝統的なライフスタイルを再現した展示空間を持ち、さまざまな追体験を実現できる道具や仕掛け、仕組みを用意

古民家の再現（赤瓦家、茅葺家、セメント瓦家、高倉等）

自然植生・生態系観察

在来文化資源保存・再生

生活体験



<屋内展示> ……→

テーマ連携展示①

典型的な
やんばる集落の
構造

山・海・川が身近に迫り、自然と共存してきた伝統的な「やんばる型集落」の提示

まち・ムラ

名護・やんばるの歴史と
くらしの変遷

首里・那覇に対するやんばるをとらえ、集落の成り立ちから名護まちの誕生と発達を、ゆかりの人物とともに展示

集落のくらしと自然

厳しい自然環境の中で形成されたやんばるの集落と、その中で育まれた生活文化や儀礼などを、これまで収集したデータや映像資料などとともに展示

テーマ連携展示②

名護グスク復元
発掘・調査の
成果

集落やグスク拝所の起源や変遷などを、名護グスクをモデルに提示。同時進行する発掘成果を展示に随時反映する

海

川

山

海のくらしと自然

名護湾・羽地内海・大浦湾という異なる3つの海をモデルに、やんばるの海の自然と人との関わりを展示

山のくらしと自然

名護岳周辺をベースに、里山・奥山の自然史と人のくらしを示し、山とともに生きる人々の生活文化、知恵などにも言及

収蔵庫<収蔵展示>



ビトゥ漁/漁具収蔵品
（過去～現在）
海洋生物標本（分類展示）
海洋生物骨格標本



生活道具の変遷（近現代資料）
娯楽・嗜好品（近現代資料）
民具・農具多様性
動物骨格標本



森林の生物標本（分類展示）
剥製・骨格標本
山のくらしの道具



